

【問題】  $a$  を実数とする. 3 次正方行列

$$A = \begin{pmatrix} 4 & 1 & 1 \\ -1 & 1 & 0 \\ -2 & -1 & 0 \end{pmatrix} \quad B = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ -3 & 4 & 0 \\ a & 2 & 1 \end{pmatrix}$$

について, 以下の問に答えよ.

- (1) 行列  $A$  の固有値と, 各固有値に対する固有空間を求めよ.
- (2)  $B = P^{-1}AP$  を満たす正則行列  $P^{-1}$  が存在するための  $a$  の条件を求めよ.

(H28 九州大学数理学府)

【解答】 (1)  $\phi_A(t) = |tE_3 - A|$  を  $A$  の固有多項式とする.

$$\Phi_A(t) = \begin{vmatrix} t-4 & -1 & -1 \\ 1 & t-1 & 0 \\ 2 & 1 & t \end{vmatrix} = (-1) \begin{vmatrix} 1 & t-1 \\ 2 & 1 \end{vmatrix} + t \begin{vmatrix} t-4 & -1 \\ 1 & t-1 \end{vmatrix} = (t-1)^2(t-3)$$

より  $A$  の固有値は  $1, 3$ . また各固有値に対し

$$A - E_3 = \begin{pmatrix} 4-1 & 1 & 1 \\ -1 & 1-1 & 0 \\ -2 & -1 & 0-1 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

$$A - 3E_3 = \begin{pmatrix} 4-3 & 1 & 1 \\ -1 & 1-3 & 0 \\ -2 & -1 & 0-3 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & 2 \\ 0 & 1 & -1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

より  $1$  に対する固有空間は  $\mathbf{q}_1 = {}^t(0, 1, -1)$  の生成する部分空間,  $3$  に対する固有空間は  $\mathbf{q}_3 = {}^t(-2, 1, 1)$  の生成する部分空間である.

(2)  $P^{-1}AP = B$  となる正則行列  $P$  が存在する為の必要十分条件は  $A$  と  $B$  の Jordan 標準形は一致する事である.  $(A - E)\mathbf{q}_2 = \mathbf{q}_1$  となる  $\mathbf{q}_2$  として,  $\mathbf{q}_2 = {}^t(-1, 3, 0)$  がとれる. (1) の  $\mathbf{q}_1, \mathbf{q}_3$  と併せて  $Q = [\mathbf{q}_1, \mathbf{q}_2, \mathbf{q}_3]$  とすれば  $A$  の Jordan 標準形は

$$Q^{-1}AQ = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 3 \end{pmatrix} = J_2(1) \oplus J_1(3) \quad J_2(1) = \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad J_1(3) = 3$$

により与えられる. 一方,  $B$  の固有多項式は  $\phi_B(t) = (t-1)^2(t-3)$  となるから  $B$  の Jordan 標準形は  $J_1(1) \oplus J_1(1) \oplus J_1(3)$ ,  $J_2(1) \oplus J_1(3)$  の何れかとなる. 固有値  $3$  を持つ Jordan 細胞は  $J_1(3)$  と確定しているのて, 固有値  $1$  を持つ Jordan 細胞について調べる.

$$B - E_3 = \begin{bmatrix} -1 & 1 & 0 \\ -3 & 3 & 0 \\ a & 2 & 0 \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} 1 & -1 & 0 \\ 0 & a+2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \quad \begin{cases} = \begin{bmatrix} 1 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} & (a+2=0) \\ \rightarrow \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} & (a+2 \neq 0) \end{cases}$$

$$(B - E_3)^2 = \begin{bmatrix} -2 & 2 & 0 \\ -6 & 6 & 0 \\ -a-6 & a+6 & 0 \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} 1 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad (B - E_3)^3 = \begin{bmatrix} -4 & 4 & 0 \\ -12 & 12 & 0 \\ -2a-12 & 2a+12 & 0 \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} 1 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

より

$$\text{Jordan 細胞 } J_2(1) \text{ の個数} = \text{rank}(B - E_3) - 2\text{rank}(B - E_3)^2 + \text{rank}(B - E_3)^3 = \begin{cases} 1 - 2 \cdot 1 + 1 = 0 & (a+2=0) \\ 2 - 2 \cdot 1 + 1 = 1 & (a+2 \neq 0) \end{cases}$$

従って  $a+2 \neq 0$  が求める条件である. □

【問題】 実数を成分とする正方行列  $B$  が交代行列、即ち  $B = -{}^t B$  を満たすとする。ただし  ${}^t B$  は  $B$  の転置行列である。さらに  $A = B^2$  とするとき、次の間に答えよ。

- (1)  $A$  の固有値は、すべて 0 以下の実数になることを示せ。
- (2) 0 以外の固有値に対する  $A$  の固有空間は偶数次元になることを示せ。

(H21 九州大学数理学府)

【解答】 (1)  $\lambda$  を  $A$  の固有値とし、 $\mathbf{v} \in \mathbb{C}^n$  を  $\lambda$  に関する  $A$  の固有ベクトルとする。 $\langle \cdot, \cdot \rangle$  を  $\mathbb{C}^n$  の標準 Hermitian 内積とすると、仮定より

$$\begin{aligned}\lambda \langle \mathbf{v}, \mathbf{v} \rangle &= \langle \lambda \mathbf{v}, \mathbf{v} \rangle = \langle A\mathbf{v}, \mathbf{v} \rangle = {}^t \mathbf{v}^t A \bar{\mathbf{v}} \\ &= {}^t \mathbf{v} ({}^t B)^2 \bar{\mathbf{v}} = {}^t \mathbf{v} ({}^t B)(-B)\bar{\mathbf{v}} = -\langle B\mathbf{v}, B\mathbf{v} \rangle.\end{aligned}$$

$\langle \mathbf{v}, \mathbf{v} \rangle \neq 0$  より  $\lambda = -\langle B\mathbf{v}, B\mathbf{v} \rangle / \langle \mathbf{v}, \mathbf{v} \rangle \leq 0$ 、即ち 0 以下の実数となる。

(2) 以下、 $\langle \cdot, \cdot \rangle$  を  $\mathbb{R}^n$  に制限した標準内積を  $(\cdot, \cdot)$  とする。 $A$  の固有値  $\lambda$  に対する固有空間を  $V_\lambda$  とする。この  $V_\lambda$  が互いに直交する  $B$  安定な 2 次元部分空間の直和となることを示す。

[1]  $\mathbf{v}_1 \in V_\lambda - \{\mathbf{0}\}$  をとる。 $A, B$  は可換だから  $V_\lambda$  は  $B$  安定、従って  $B\mathbf{v}_1 \in V_\lambda$  となる。また  $B\mathbf{v}_1 = \mathbf{0}$  だとすると、 $A\mathbf{v}_1 = B(B\mathbf{v}_1) = \mathbf{0}$  となるが、これは  $A\mathbf{v}_1 = \lambda\mathbf{v}_1 \neq \mathbf{0}$  に反するから  $B\mathbf{v}_1 \neq \mathbf{0}$  となる。次に  $a_1\mathbf{v}_1 + b_1B\mathbf{v}_1 = \mathbf{0}$  だとする。両辺に  $B$  を掛け、前者に  $a_1$ 、後者に  $b_1$  を掛けて辺々を引けば

$$(a_1^2\mathbf{v}_1 + a_1b_1B\mathbf{v}_1) - (\lambda b_1^2\mathbf{v}_1 + a_1b_1B\mathbf{v}_1) = (a_1^2 - \lambda b_1^2)\mathbf{v}_1 = \mathbf{0}.$$

$\mathbf{v}_1 \neq \mathbf{0}$  より  $a_1^2 - \lambda b_1^2 = 0$ 。 $\lambda < 0$  より  $a_1 = b_1 = 0$ 、従って  $\mathbf{v}_1, B\mathbf{v}_1$  は 1 次独立である。ここで  $\mathbf{v}_1, B\mathbf{v}_1$  により生成される  $V_\lambda$  の部分空間を  $V_1$  とする。

[2] 仮に互いに直交する  $B$  安定な  $V_\lambda$  の 2 次元部分空間  $V_1, \dots, V_s$  がとれたとする。このとき  $V_\lambda$  於ける  $V_1 \oplus \dots \oplus V_s$  の直交補空間を  $W_s$  とすれば、 $\mathbf{w} \in W_s$  について

$$(B\mathbf{w}, \mathbf{v}) = -(\mathbf{w}, B\mathbf{v}) = 0 \quad (\forall \mathbf{v} \in V_1 \oplus \dots \oplus V_s)$$

となるから  $W_s$  も  $B$  に関し安定である。

[3]  $W_s \neq 0$  ならば  $\mathbf{v}_{s+1} \in W_s - \{\mathbf{0}\}$  がとれる。[1] と同様の議論より  $\mathbf{v}_{s+1}, B\mathbf{v}_{s+1}$  は 1 次独立。この 2 つのベクトルにより生成される部分空間を  $V_{s+1}$  とすれば、 $V_{s+1}$  は  $B$  安定であり、 $V_{s+1} \subset W_s$  より  $V_1, \dots, V_{s+1}$  は互いに直交する。ここで再び [2] の議論に戻る。

[4]  $W_s = 0$  ならば  $V_\lambda = V_1 \oplus \dots \oplus V_s$ 。

$V_\lambda$  は有限次元だから有限回で [4] に到達する。故に  $V_\lambda$  は偶数次元となる。 □

【問題】 単位行列を  $I$  とする.  $n$  次直交行列のうち, 行列式の値が 1 となるもの全体の集合を  $SO(n)$  と書く:

$$SO(n) = \{A \mid A \text{ は実数を成分とする } n \text{ 次の正方行列で } {}^tAA = A^tA = I, \det A = 1\}$$

(1) どんな行列  $T \in SO(2)$  に対しても, ある実数  $\theta$  が存在して

$$T = \begin{bmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{bmatrix}$$

と表される事を示せ.

(2) 行列  $A \in SO(3)$  で, その成分に 0 となるものが一つもないものを具体的に一つ挙げよ.

(3) 行列  $A \in SO(3)$  の固有値の絶対値は 1 である事を示せ. さらにその固有値の少なくとも一つは 1 であることを証明せよ.

(4) 行列  $A, B \in SO(3)$  が, 固有値 1 に対する固有ベクトルを共有しているならば  $AB = BA$  を満たす事を証明せよ.

(5) 逆に行列  $A, B \in SO(3)$  が  $AB = BA$  を満たすならば, 固有値 1 に対する固有ベクトルを共有しているか? 正しければ証明し, 誤りであるならば反例を挙げよ.

(H16 九州大学数理学府)

【解答】 (1)  $T = \begin{bmatrix} x & y \\ z & w \end{bmatrix}$  とするとき,

$${}^tTT = \begin{bmatrix} x & z \\ y & w \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x & y \\ z & w \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} x^2 + z^2 & xy + zw \\ xy + zw & y^2 + w^2 \end{bmatrix}$$

より  $T \in SO(2)$  ならば  $x^2 + z^2 = 1$ ,  $y^2 + w^2 = 1$ ,  $xy + zw = 0$  かつ  $xw - yz = 1$  でなければならない. 前半二式より  $x = \cos \theta$ ,  $z = \sin \theta$ ,  $y = \cos \eta$ ,  $w = \sin \eta$  となる実数  $\theta, \eta$  が存在する. 後半二式より

$$\cos(\eta - \theta) = \cos \theta \cos \eta + \sin \theta \sin \eta = 0, \quad \sin(\eta - \theta) = \cos \theta \sin \eta - \cos \eta \sin \theta = 1$$

となるから  $\eta - \theta = \pi/2$  となる. よって  $T$  は実数  $\theta$  を用いて

$$T = \begin{bmatrix} \cos \theta & \cos(\theta + \frac{\pi}{2}) \\ \sin \theta & \sin(\theta + \frac{\pi}{2}) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{bmatrix}$$

と表される.

(2)  $\mathbf{v}_1 = {}^t[1, 1, 1]$ ,  $\mathbf{v}_2 = {}^t[3, -2, -1]$ ,  $\mathbf{v}_3 = {}^t[1, 4, -5]$  と置く. このとき  $\mathbf{v}_1 \cdot \mathbf{v}_2 = \mathbf{v}_1 \cdot \mathbf{v}_3 = \mathbf{v}_2 \cdot \mathbf{v}_3 = 0$  となる事が容易に確かめ

られる.  $\mathbf{v}_i$  を正規化したもの並べた行列  $A = \begin{bmatrix} \frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{3}{\sqrt{14}} & \frac{1}{\sqrt{42}} \\ \frac{1}{\sqrt{3}} & -\frac{2}{\sqrt{14}} & \frac{4}{\sqrt{42}} \\ \frac{1}{\sqrt{3}} & -\frac{1}{\sqrt{14}} & -\frac{5}{\sqrt{42}} \end{bmatrix}$  は所望の行列の一つとなる.

(3)  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  を  $\mathbb{C}^3$  の標準 Hermite 内積とする.  $\omega$  を  $A$  の固有値,  $\mathbf{v}$  を  $\omega$  に対する固有ベクトルとすると

$$|\omega|^2 \langle \mathbf{v}, \mathbf{v} \rangle = \langle \omega \mathbf{v}, \omega \mathbf{v} \rangle = \langle A\mathbf{v}, A\mathbf{v} \rangle = \langle \mathbf{v}, {}^tAA\mathbf{v} \rangle = \langle \mathbf{v}, \mathbf{v} \rangle$$

だから  $|\omega|^2 = 1$ ,  $|\omega| = 1$  となる. また

$$|E_3 - A| = |{}^t(E_3 - A)| = |E_3 - {}^tA| = |{}^tA||A - E_3| = |A|(-|E_3 - A|) \quad \therefore (1 + |A|)\phi_A(1) = 0$$

$|A| = 1$  より  $\phi_A(1) = 0$ , 即ち 1 は固有値である.

(4)  $\mathbf{v}$  を固有値 1 に対する  $A, B$  の共通の単位固有ベクトルとする.  $\mathbb{R}^3$  上の標準内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  に関する  $\mathbf{v}_1$  直交補空間を  $W$ ,  $\{\mathbf{v}_2, \mathbf{v}_3\}$  を  $W$  の正規直交基底とする. このとき  $\{\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \mathbf{v}_3\}$  は  $\mathbb{R}^3$  の正規直交基底, よって  $P = [\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \mathbf{v}_3]$  は直交行列である. また任意の  $\mathbf{w} \in W$  に対し

$$\langle \mathbf{v}_1, A\mathbf{w} \rangle = \varepsilon \langle A\mathbf{v}_1, A\mathbf{w} \rangle = \varepsilon \langle \mathbf{v}_1, \mathbf{w} \rangle = 0$$

より  $AW \subset W$ .  $B$  についても同様. これより

$${}^tPAP = \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{o} \\ \mathbf{o} & T \end{bmatrix}, \quad {}^tPBP = \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{o} \\ \mathbf{o} & S \end{bmatrix}, \quad (T, S \in M_2(\mathbb{R}))$$

という形になる.

$$\begin{bmatrix} 1 & \mathbf{o} \\ \mathbf{o} & {}^tTT \end{bmatrix} = {}^t \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{o} \\ \mathbf{o} & T \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{o} \\ \mathbf{o} & {}^tT \end{bmatrix} = {}^tP^tAAP = E_3$$

より  ${}^t T T = E_2$ .  $|T| = |A| = 1$  より  $T \in SO(2)$  となる. 同様の議論により  $S \in SO(2)$  も分かる. よって  $T, S$  は (1) の形に表される. (1) の形の行列は互いに可換だから  $TS = ST$ .

$$\therefore AB = P \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{o} \\ \mathbf{o} & T \end{bmatrix} {}^t P \cdot P \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{o} \\ \mathbf{o} & S \end{bmatrix} {}^t P = P \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{o} \\ \mathbf{o} & TS \end{bmatrix} {}^t P = P \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{o} \\ \mathbf{o} & ST \end{bmatrix} {}^t P = P \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{o} \\ \mathbf{o} & S \end{bmatrix} {}^t P \cdot P \begin{bmatrix} 1 & \mathbf{o} \\ \mathbf{o} & T \end{bmatrix} {}^t P = BA$$

(5) 一般に成立しない.

(反例)  $A = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & -1 \end{bmatrix}$ ,  $B = \begin{bmatrix} -1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & -1 \end{bmatrix}$  とする.  $A, B$  は共に  $SO(3)$  の元であり,  $AB = BA = \begin{bmatrix} -1 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{bmatrix}$  となる.

$$A - E_3 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & -2 & 0 \\ 0 & 0 & -2 \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad B - E_3 = \begin{bmatrix} -2 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -2 \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

より固有値 1 に対する  $A$  の固有ベクトルは  ${}^t [c, 0, 0]$ ,  $B$  の固有ベクトルは  ${}^t [0, c, 0]$  ( $c$  は 0 ではない定数) だから,  $A, B$  は固有値 1 の固有ベクトルを共有しない.  $\square$

【問題】 二つの  $n$  次複素正方行列  $A, B$  が相似であるとは  $P^{-1}AP = B$  となる  $n$  次複素正則行列  $P$  が存在する事と定義し、 $A \sim B$  と書く。

- (1)  $\sim$  は  $n$  次複素正方行列全体の集合上の同値関係である事を証明せよ。  
 (2) 各  $A_i$  ( $i = 1, 2, 3, 4, 5$ ) を次で定義される 5 次正方行列とする。どの  $A_i$  とどの  $A_j$  が相似になるかを決定せよ。また相似になるときはそれぞれの場合に  $P^{-1}A_iP = A_j$  となる正則行列  $P$  を具体的に与えよ。

$$A_1 = \begin{bmatrix} 2 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 2 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 2 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 2 \end{bmatrix} \quad A_2 = \begin{bmatrix} 2 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 2 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 2 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 2 \end{bmatrix} \quad A_3 = \begin{bmatrix} 2 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 2 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 2 & 3 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 2 \end{bmatrix}$$

$$A_4 = \begin{bmatrix} 2 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 2 & 1 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 2 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 2 \end{bmatrix} \quad A_5 = \begin{bmatrix} 2 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 2 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 2 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 & 2 \end{bmatrix}$$

(H16 九州大学数理学府)

【解答】 (1) (反射律)  $E_n^{-1}AE_n = A$  ( $E_n$  は  $n$  次単位行列) より  $A \sim A$ .  
 (対称律)  $P^{-1}AP = B$  となる  $n$  次正則行列  $P$  が存在したとする。このとき  $P^{-1}$  は再び正則であり、 $A = PBP^{-1} = (P^{-1})^{-1}BP^{-1}$  が成立。従って  $A \sim B$  ならば  $B \sim A$  である。  
 (推移律)  $n$  次正方行列  $A, B, C$  に対し  $P^{-1}AP = B$ ,  $Q^{-1}BQ = C$  となる  $n$  次正則行列  $P, Q$  が存在したとする。このとき  $PQ$  は正則であり、 $(PQ)^{-1}APQ = Q^{-1}P^{-1}APQ = Q^{-1}BQ = C$  となる。従って  $A \sim B$ ,  $B \sim C$  ならば  $A \sim C$  である。

以上より  $\sim$  は同値関係である事が確かめられた。

(2) 一般に  $A, B$  が相似である事と Jordan 標準形が一致する事は同値だから、相似関係を調べる為に  $A_i$  の Jordan 標準形を計算する。 $B_i = A_i - 2E_5$  とすれば

$$B_1 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad B_1^2 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad B_1^3 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad B_1^4 = O$$

$$B_3 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 3 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad B_3^2 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 3 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad B_3^3 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 6 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad B_3^4 = O$$

$$B_4 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad B_4^2 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad B_4^3 = O,$$

$$B_2 = \begin{bmatrix} 0 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad B_2^2 = O, \quad B_5 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad B_5^2 = O$$

となるから、各  $A_i$  に関する Jordan 標準形は次のように決定される：

$A_1$  について：

$$\begin{aligned} \text{rank } B_1 &= 3, & \text{rank } B_1^2 &= 2, & \text{rank } B_1^3 &= 1, & \text{rank } B_1^4 &= 0 \\ \text{rank } B_1^0 - 2\text{rank } B_1^1 + \text{rank } B_1^2 &= 5 - 6 + 2 = 1, & \text{rank } B_1^1 - 2\text{rank } B_1^2 + \text{rank } B_1^3 &= 3 - 4 + 1 = 0, \\ \text{rank } B_1^2 - 2\text{rank } B_1^3 + \text{rank } B_1^4 &= 2 - 2 + 0 = 0, & \text{rank } B_1^3 - 2\text{rank } B_1^4 + \text{rank } B_1^5 &= 1 - 0 + 0 = 1 \end{aligned}$$

より  $A_1 \sim J_1(2) \oplus J_4(2)$ .

$A_2$  について：

$$\begin{aligned} \text{rank } B_2 &= 1, & \text{rank } B_2^2 &= 0 \\ \text{rank } B_2^0 - 2\text{rank } B_2^1 + \text{rank } B_2^2 &= 5 - 2 + 0 = 3, & \text{rank } B_2^1 - 2\text{rank } B_2^2 + \text{rank } B_2^3 &= 1 - 0 + 0 = 1 \end{aligned}$$

より  $A_2 \sim J_1(2) \oplus J_1(2) \oplus J_1(2) \oplus J_2(2)$ .

$A_3$  について :

$$\begin{aligned} \text{rank } B_3 &= 3, & \text{rank } B_3^2 &= 2, & \text{rank } B_3^3 &= 1, & \text{rank } B_3^4 &= 0 \\ \text{rank } B_3^0 - 2 \text{rank } B_3^1 + \text{rank } B_3^2 &= 5 - 6 + 2 = 1, & \text{rank } B_3^1 - 2 \text{rank } B_3^2 + \text{rank } B_3^3 &= 3 - 4 + 1 = 0, \\ \text{rank } B_3^2 - 2 \text{rank } B_3^3 + \text{rank } B_3^4 &= 2 - 2 + 0 = 0, & \text{rank } B_3^3 - 2 \text{rank } B_3^4 + \text{rank } B_3^5 &= 1 - 0 + 0 = 1 \end{aligned}$$

より  $A_3 \sim J_1(2) \oplus J_4(2)$ .

$A_4$  について :

$$\begin{aligned} \text{rank } B_4 &= 3, & \text{rank } B_4^2 &= 1, & \text{rank } B_4^3 &= 0 \\ \text{rank } B_4^0 - 2 \text{rank } B_4^1 + \text{rank } B_4^2 &= 5 - 6 + 1 = 0, & \text{rank } B_4^1 - 2 \text{rank } B_4^2 + \text{rank } B_4^3 &= 3 - 2 + 0 = 1, \\ \text{rank } B_4^2 - 2 \text{rank } B_4^3 + \text{rank } B_4^4 &= 1 - 0 + 0 = 1 \end{aligned}$$

より  $A_4 \sim J_2(2) \oplus J_3(2)$ .

$A_5$  について :

$$\begin{aligned} \text{rank } B_5 &= 1, & \text{rank } B_5^2 &= 0 \\ \text{rank } B_5^0 - 2 \text{rank } B_5^1 + \text{rank } B_5^2 &= 5 - 2 + 0 = 3, & \text{rank } B_5^1 - 2 \text{rank } B_5^2 + \text{rank } B_5^3 &= 1 - 0 + 0 = 1 \end{aligned}$$

より  $A_5 \sim J_1(2) \oplus J_1(2) \oplus J_1(2) \oplus J_2(2)$ .

これより  $A_1 \sim A_3$ ,  $A_2 \sim A_5$  となる.  $P_1 = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 6 \end{bmatrix}$  とすれば  $P_1^{-1}A_1P_1 = A_3$ . また  $P_2 = \begin{bmatrix} 0 & 1 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{bmatrix}$

とすれば  $P_2^{-1}A_5P_2 = A_2$  となる. □

【問題】

- (1)  $W_1, W_2$  を  $\mathbb{R}^n$  の線形部分空間とすると、次の事を証明せよ。  
 (i)  $W_1, W_2$  に共通なベクトルの全体  $W_1 \cap W_2$  は  $\mathbb{R}^n$  の線形部分空間である。  
 (ii)  $W_1, W_2$  の元の和で表されるベクトルの全体  $W_1 + W_2$  は  $\mathbb{R}^n$  の線形部分空間である。  
 (iii) 次の式が成り立つ。

$$\dim W_1 + \dim W_2 = \dim(W_1 + W_2) + \dim(W_1 \cap W_2)$$

- (2)  $W_1, W_2, \dots, W_k$  を  $\mathbb{R}^n$  の線形部分空間とすると、次の二つの条件は同値であることを証明せよ。  
 (i)  $W_i \cap (W_1 + \dots + W_{i-1} + W_{i+1} + \dots + W_k) = \{\mathbf{0}\}$ , ( $i = 1, \dots, k$ ).  
 (ii)  $\dim(W_1 + W_2 + \dots + W_k) = \dim W_1 + \dim W_2 + \dots + \dim W_k$ .

(H14 九州大学数理学府)

【解答】(1) (i)  $\mathbf{o} \in W_1$  かつ  $\mathbf{o} \in W_2$  より  $\mathbf{o} \in W_1 \cap W_2$ .  $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2 \in W_1 \cap W_2$ ,  $\alpha_1, \alpha_2 \in \mathbb{R}$  だとする.  $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2 \in W_1$ , かつ  $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2 \in W_2$  より

$$\alpha_1 \mathbf{x}_1 + \alpha_2 \mathbf{x}_2 \in W_1 \quad \text{かつ} \quad \alpha_1 \mathbf{x}_1 + \alpha_2 \mathbf{x}_2 \in W_2$$

だから  $\alpha_1 \mathbf{x}_1 + \alpha_2 \mathbf{x}_2 \in W_1 \cap W_2$ . 従って  $W_1 \cap W_2$  は  $\mathbb{R}^n$  の線形部分空間である.

(ii)  $\mathbf{o} = \mathbf{o} + \mathbf{o} \in W_1 + W_2$ . 次に  $\mathbf{x}_1 + \mathbf{x}_2, \mathbf{y}_1 + \mathbf{y}_2 \in W_1 + W_2$  ( $\mathbf{x}_1, \mathbf{y}_1 \in W_1, \mathbf{x}_2, \mathbf{y}_2 \in W_2$ ),  $\alpha_1, \alpha_2 \in \mathbb{R}$  とする.  $\alpha \mathbf{x}_1 + \alpha_2 \mathbf{y}_1 \in W_1$ , かつ  $\alpha \mathbf{x}_2 + \alpha_2 \mathbf{y}_2 \in W_2$  より

$$\alpha_1(\mathbf{x}_1 + \mathbf{x}_2) + \alpha_2(\mathbf{y}_1 + \mathbf{y}_2) = (\alpha_1 \mathbf{x}_1 + \alpha_2 \mathbf{y}_1) + (\alpha_1 \mathbf{x}_2 + \alpha_2 \mathbf{y}_2) \in W_1 + W_2.$$

従って  $W_1 + W_2$  は  $\mathbb{R}^n$  の線形部分空間である.

(iii)  $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_r$  を  $W_1 \cap W_2$  の基底とし,  $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_r, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_s$  が  $W_1$  の基底,  $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_r, \mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_t$  が  $W_2$  の基底となるような  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_s \in W_1$ , 及び  $\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_t \in W_2$  をとる.

- ・  $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_r, \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_s, \mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_t$  が  $W_1 + W_2$  を生成する事は自明.
- ・  $x_1 \mathbf{u}_1 + \dots + x_r \mathbf{u}_r + y_1 \mathbf{v}_1 + \dots + t_s \mathbf{v}_s + z_1 \mathbf{w}_1 + \dots + z_t \mathbf{w}_t = \mathbf{o}$  だとすると

$$x_1 \mathbf{u}_1 + \dots + x_r \mathbf{u}_r + y_1 \mathbf{v}_1 + \dots + t_s \mathbf{v}_s = -z_1 \mathbf{w}_1 - \dots - z_t \mathbf{w}_t \in W_1 \cap W_2$$

だから  $y_1 = \dots = y_s = 0$ . 更に  $x_1 \mathbf{u}_1 + \dots + x_r \mathbf{u}_r + z_1 \mathbf{w}_1 + \dots + z_t \mathbf{w}_t = \mathbf{o}$  だから  $x_1 = \dots = x_r = z_1 = \dots = z_t = 0$  となり  $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_r, \mathbf{y}_1, \dots, \mathbf{y}_s, \mathbf{z}_1, \dots, \mathbf{z}_t$  は一次独立である.

以上より  $\mathbf{x}_1, \dots, \mathbf{x}_r, \mathbf{y}_1, \dots, \mathbf{y}_s, \mathbf{z}_1, \dots, \mathbf{z}_t$  は  $W_1 + W_2$  の基底であり,

$$\dim(W_1 + W_2) + \dim W_1 \cap W_2 = r + s + t + r = r + s + r + t = \dim W_1 + \dim W_2$$

となる.

(2) 部分空間の個数  $k$  に関する帰納法により証明する.  $k = 1$  のときは自明. 次に  $k > 1$  とし,  $k - 1$  個までの部分空間についての成立を仮定する. 今,  $k$  個の部分空間  $W_1, \dots, W_k$  について (i) が成立したとすると. このとき

$$W_i \cap (W_1 + \dots + W_{i-1}) \subset W_i \cap (W_1 + \dots + W_{i-1} + W_{i+1} + \dots + W_k) = \{\mathbf{o}\}.$$

従って  $W_i \cap (W_1 + \dots + W_{i-1}) = \{\mathbf{o}\}$  となるから, (1) (iii) と帰納法の仮定より

$$\begin{aligned} \dim(W_1 + \dots + W_k) &= \dim(W_1 + \dots + W_{k-1}) + \dim W_k - \dim(W_1 + \dots + W_{k-1}) \cap W_k \\ &= \dim(W_1 + \dots + W_{k-1}) + \dim W_k - 0 = \dim W_1 + \dots + \dim W_{k-1} + \dim W_k. \end{aligned}$$

一方, (ii) を仮定すると, (1) (iii) 及び帰納法の仮定より

$$\begin{aligned} &\dim(W_i \cap (W_1 + \dots + W_{i-1} + W_{i+1} + \dots + W_k)) \\ &= \dim W_i + \dim(W_1 + \dots + W_{i-1} + W_{i+1} + \dots + W_k) - \dim(W_1 + \dots + W_i + \dots + W_k) \\ &= \dim W_i + \dim W_1 + \dots + \dim W_{i-1} + \dim W_{i+1} + \dots + \dim W_k - \dim W_1 - \dots - \dim W_i - \dots - \dim W_k = 0 \end{aligned}$$

より  $W_i \cap (W_1 + \dots + W_{i-1} + W_{i+1} + \dots + W_k) = \{\mathbf{o}\}$  となる. 以上より任意の  $k$  に対し (i) (ii) の同値性が示された. □